21　　再会した二人　　　　　　　　　　読解のつぼ②　助詞で人物関係を把握する

　昔、男ありけり。宮仕へ忙しく、心もまめならざりけるほどの、①まめに思はむといふ人につきて、②人の国へにけり。

　この男、の使ひにて行きけるに、ある国のののにてなむあるとＡ聞きて、

　「女あるじにかはらけ取らせよ。③さらずは飲まじ」

とＢ言ひければ、かはらけ取りてＣだしたりけるに、なりけるをＤ取りて、

　　　まつ花たちばなの香をかげば④昔の人のの香ぞする

とＥ言ひけるにぞＦ思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

* 語注

家刀自＝家事をつかさどる女性。ここでは、「男」の妻のこと。

　　　宇佐の使ひ＝朝廷から（大分県）の宇佐に派遣された使者。

　　　祗承の官人＝朝廷からの使者が地方に下った時、接待する役人。

　　　女あるじ＝祗承の官人の妻。官人邸の女主人。

　　　かはらけ＝素焼きの。「かはらけ取る」で酌をするの意味。

　　　肴なりける橘＝酒の肴としてあった橘。

【原文】

　昔、男ありけり。宮仕へ忙しく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へ往にけり。

　この男、宇佐の使ひにて行きけるに、ある国の祗承の官人の妻にてなむあると聞きて、

　「女あるじにかはらけ取らせよ。さらずは飲まじ」

と言ひければ、かはらけ取りて出だしたりけるに、肴なりける橘を取りて、

　　五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

と言ひけるにぞ思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

問一　二重線部Ａ〜Ｆの主語について、「男」「女あるじ」のどちらかを答えよ。〈２点×６〉

Ａ〔　　　　　〕　Ｂ〔　　　　　〕　Ｃ〔　　　　　〕　Ｄ〔　　　　　〕

Ｅ〔　　　　　〕　Ｆ〔　　　　　〕

問二　傍線部①の解釈として最も適当なものを選べ。〈８点〉

ア　女を真剣に愛してくれていると思う人　　イ　女をまじめだと判断するような人

ウ　女のためによく働いてくれる人　　　　　エ　女のことを誠実に愛そうという人

〔　　　〕

問三　傍線部②とあるが、家刀自がこのようにしたのはなぜか。三十字以内で答えよ。〈15点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問四　傍線部③を、「さらず」の内容を明らかにして現代語訳せよ。〈７点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部④とはどういうことか。最も適当なものを選べ。〈８点〉

ア　古歌にある橘を思い浮かべたということ。

イ　妻と別れて泣いた日のことが思い出されたということ。

ウ　元の妻との思い出が呼び起こされたということ。

エ　以前住んでいた家の橘を想像したということ。

〔　　　〕

【解答】

問一　Ａ＝男　Ｂ＝男　Ｃ＝女あるじ　Ｄ＝男　Ｅ＝男　Ｆ＝女あるじ〈２点×６〉

問二　エ〈８点〉

問三　夫が宮仕えに忙しく、妻である自分に誠実でなかったから。（27字）〈15点〉

問四　もし女主人が酌をしないならば飲むまい。〈７点〉

問五　ウ〈８点〉

【現代語訳】

昔、男がいた。宮仕えが忙しく、愛情も誠実に注いでやらなかったときの妻が、誠実に愛そうという人につき従って、他国へ行ってしまった。

この男が、宇佐の使いとして行った時に、（別れた妻が）ある国の接待する役人の妻になっていると聞いて、

（男が）「この家の女主人に盃を捧げさせよ〔＝酌をさせよ〕。もしそうでないならば（酒は）飲むまい」

と言ったので、（女主人が）盃を捧げ持って差し出したところ、（その酒宴の）さかなであった橘を手に持って、

五月まつ花たちばなの香りをかぐと、昔親しんだ人〔＝別れた妻〕の袖の香りがなつかしく香ってきます。

と詠んだことに（この男は昔の夫だったと）思い出して、（我が身を恥じて）尼になって、山に籠もって暮らした。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「思ひ出でて」（８行目）とあるが、「女あるじ」は何を「思ひ出で」たのか。最も適当なものを選べ。

ア　自分が昔の夫に愛情を注いでいなかったこと。

イ　昔の夫が若いときに宮仕えをしていたこと。

ウ　昔の夫が橘の花を好んで育てていたこと。

エ　目の前にいる男が昔の夫であったこと。

問２　「山に入りてぞありける」（８行目）とはどういうことか。最も適当なものを選べ。

ア　昔の夫への未練を断ち切るために、修行に励んだということ。

イ　昔の夫を見捨てた我が身を恥じて、俗世を捨てて山に籠もったということ。

ウ　昔の夫の冷たさが自分のせいであったことに気づき、尼になったということ。

エ　昔の夫と共に仏門に入り、二人で慎ましい生活を送ったということ。

【補充問題解答】

問１　エ

問２　イ